

カタコンブの光景

瀬田康司

地下鉄四号線ダンフェール・ロシュロー駅を降り立つ。中央ロータリーの島地のようなところに建つ、やや大きめの小屋風の建物が、この日、目指すところである。

ぼくがパリの「地下」にまつわる歴史、建築について興味を持っていると聞き及んだのであろう、数人の知人・友人から、「catacombe（カタコンブ）はもう行きましたか？」とのお薦めをいただいた。その中で、TAさんが「瀬田さん、カタコンブに行きましょう。連れてって下さい。」とのお誘い。TAさんというのはこちらで知り合った若き友人である。通訳の任を勤めて下さる学習院OBのKAさん同様、全身個性あふるる、好奇心旺盛なお嬢さんで、ぼくのエッセイ小品を、できあがるごとに読んでくださり、ぼくと同じ目線でパリを捉えなおして下さっていた。ぼくのパリの「地下」の話にはとりわけ興味をお持ちになり、ご自身でも書物を求めて調べておられる。TさんはKさんと語学学校のクラスメートであり、Kさんを通じて親しくさせていただいている人だ。今春、Rennes（レンヌ）生まれの青年とご結婚とか。立会人という重い役を求められたが、すでにこの身はフランスにはなく日本で仕事に追われているはずとあって、丁重にお断りをせざるを得なかった。

さて、Tさん、Kさんという、フランス語の達者な若いお嬢さんが仲間とあっては心強い。カタコンブに関わる書物をぜひ求めたいと思っていたが、入り口の売店でそれを求めたものかどうか。地下を数キロ歩くわけだからなるべく荷は軽い方がいい。念のため出口で本は売っているかと訊ねてもらおうという恩恵にさっそくあずかることになる。出口では売っていないということなので買い求め、チケットを購入。チケットをもらいとき「写真を撮っていいですか？」と訊ねたら、「本当は禁止されているけれど、ぼくが許可するよ。」とウインクをいただいた。さて、そのウインクの意味するところはどうだろう？後のことになるが、しばらくは係員がいなかったもので、写真は、なるほど受付の言うように、「ぼくが許可するよ」に従って自由自在に撮ることができたけれど、やがて数人の係員が厳しい目を光らせて監視しているところに出る。「ぼくが許可するよ」がどれほどの威力を發揮するのか分からないし、写真を撮るときに係員に叱責があっても、いちいち受付が許可したと抗弁するために二人のお嬢さんの力を拝借するほど図々しくもないぼくである。そればかりではない。その係員のいるところは、後に述べるように、まさしく敬虔な場所であり、素人が好奇心のみで撮ることなどできはしないところであった。

回転棒の入り口を通るとすぐに地下に続く階段がある。一人一人が通るのにやっとの広さの螺旋階段。グルグルグルと何回転したことだろう、「目が回ってきたよ。」などと冗談を飛ばしている

うちは、ただただ好奇心のみが支配し、早く先に進みたい、という気概を持っているが、やがて、「この階段を、いつも上り下りをしていた人々と同じことをしているわけだ。」という感傷が湧いてくると、少し不安になってくる。もちろん外の灯りは差し込んでこないわけだから、薄明かりの電灯のみで、天上からの水の滴り、足下の濡れた石。それらに気を配って、少しゆっくりと、足下を確かめながら階段を下っていく。

地下 50 メートルまで続く螺旋階段を下りると、水分をたっぷり含んだ、しかし靴が濡れるほどではない坑道となる。両壁は大きな岩であったりパリの街を作っている方形の石を積み重ねていたりしている。天井は緩やかなアーチ型である。ここも方形の石で作られていたり、やはり巨大な岩塊であったりする。それにしても坑道には天井を支える柱は一つもない。これで落盤がないわけであるから、相当の技術が施されているのだろう。

側壁に 1782 とかの数字が書かれているのは、この坑道が作られた年なのだろうか。また rue *** などとも書かれている。坑道の通り名のことだろうと思っていたが、K さんから、この坑道の上を通っている通りの名ではないか、との指摘を受けた。そうかもしれない。もし K さんの指摘の通り、頭上の通り名が書かれているとするならば、この地下道を通っていけば目的の建築物のところに行き着くことができる。つまり、人目を避けて通るためという目的を持っている坑道、地下道ということになる。フランス革命期の社会動乱の際、追う者追われる者、この地下道を走り過ぎたのであろうか。そればかりではない。ぼくが確かめた限りでは、1871 年のパリ・コミュンの際、政府軍に追いつめられた人々がここを逃げ場として利用している。また、第 2 次世界大戦時にも、ドイツ軍・ナチによって追われたレジスタンスも、この坑道を大いに利用していた。こう考えると、ぼくにとってのカタコンブとは、非権力・反権力の側が利活用していたところ、ということになる。しかしながら、それがあくまでも一つの側の歴史観でしかないことを、後日ガイドブックで知ることになる。つまり、フランス革命期の民衆に追われた王族・貴族、第二帝政期のナポレオン III 世がやはり政権の場を追われ、一時的にここで「玉座」を創り、政治を司っているそうだ。残念ながらその「玉座」の場は一般には公開されていないようである。それとも入り組んだ坑道を、我慢をして、つまり迷い込むことを覚悟して、もう少し歩き回ればよかったのだろうか。「玉座」への「入り口」ぐらいには行き着いたかもしれないのだ。

T さんは沖縄のご出身。第 2 次世界大戦での敗戦が決定してもなお沖縄戦は続けられ、その結果、日本軍によって多くのいのちが奪われるという悲惨きわまりない歴史をその身に背負っておられる。「私はどうしても正面切って『沖縄』を見つめることができないまま、大人になり、沖縄を出ました。三度も映画化された『ヒメユリ』は一度も見ていません。見るができなかったのです。」と、坑道に刻み込まれている数字を見つめながら、ぼくたちに語って下さった。「いや、

事実は正視しなければ」と言えるほどにぼくは『沖縄』のことを知っているのだろうかと思うと、
ついつい概念的に語ってしまいそうな教師根性をぐっと押さえ、薄明かりに浮かぶことによって、
ますます彫りが深く見える沖縄人の姿を見つめた。正視できないと言われるけれども、直接に経
験していなくても、そのからだど心の中に刻み込まれている「歴史」の重さを実感しておられる
ことに対して、率直に言って、感動さえ覚えたのである。以上は、問わず語りの、ぼくの坑道利
活用の話に、Tさんがお応え下さったお話のあらまし紹介である。

坑道がやや広いところに行き着く。ここはどうやら、地下空間をどのようにして落盤させるこ
となく保っているのか、という模擬の場として創られたようである。直径1メートルほどの太い
支柱が立っている。もちろん四角い石を組み合わせて作ったもので、半円柱形をしていたのは、
その内部構造、つまり組み立ての技術について視覚的に説明しようとするものだろう。薄暗く、
湿りきった、さほど広くない坑道は抑圧感がある。その抑圧感がかなり高まった頃に、この空間
がある。ほっと一息をつき、坑道について、その成り立ち、構造を知ってみるには、まさしく頃
合いを見計らったようにつくられている。それが偶然なのかどうかは、ぼくには分からない。少
なくともぼくたち三人にとっては、一息つき、説明文を読み、四周の粘土状の土、石灰石の層を
手に触って確かめ、「この石灰岩が小さく四角に切り出され、この粘土が積み重ねる石の間に挟み
込まれて、あのパリの建物ができたんですね。」などとの語り合いをすることのできる、落ちつい
た空間となっていた。

再び坑道を歩く。幾重にも枝分かれしているらしいことは、いたるところに鉄柵が施され、そ
の鉄柵を通してその奥をのぞき見ることによって知ることができる。ぼくがもっとも興味を持っ
てカタコンブを捉えていた採石場は、残念ながら鉄柵の向こうに続く坑道のさらに奥にあるよう
である。いつしか佐渡鉱山を見学したときに、金を採掘する作業現場が再現されていたことが頭
の片隅にあり、佐渡鉱山の抗夫たちとフランス・パリの抗夫たちとの「違い」—それは作業の違
いばかりではなく、抗夫・監督者の風体の違いすべてなのだが—をどうしても実感的に知りたか
ったからである。前もって『パリの地下』という書物で近代に入ってから作業現場の写真、近
代以前のそのイラストで確かめてはあったけれど、やはり蠟人形などで当時の場面が再現され
ているのを見るのとは、「感性」の部分で大きな違いがある。しかし、一介の見学者には坑道のみ
が開放されているに過ぎず、ぼくの願いは叶わなかった。

坑道は真っ直ぐ続き、行き当たると左右いずれかに直角に曲がる。かなり頻繁に年号らしき数
字が書かれ、通り名のプレートがはめ込まれている。その繰り返しである。説明する案内板は
先ほどの狭い広場以外には、ほとんどない。あっても薄暗がりの中なので、前もって懐中電灯を
用意しておかなければ、フランス語になれていない身にはとうてい無理であった。見学者の想像

に任せる…不親切なような親切なような「観光」施設ではある。Tさん、Kさん、ぼくは、それぞれが、事前にパリという街づくりについてある程度知識を得ていたから、その坑道が、いろいろな歴史を持っていること、坑道の両壁の岩盤、土の層がどういう意味を持っているのかについてはすでに知っている。採石場を見ることができないとなると、あとはそこを足早に通りすぎるか、それとも新たな想像をするかしかないわけである。それぞれがそれぞれに思いをめぐらせながら坑道をゆっくり進む。ぼくは、日本の炭鉱労働者の歌を心の中で口ずさむ。学生時代によく歌った。「今朝も早よから、カンテラ下げて、ナイ…」。

お二人のどちらからであったろう、「換気はどうなっているのでしょうかね。」との問いが出された。もちろん今日では通風口が整備され、電気モーターによって湿り濁った空気は強制排出されているはずである。ぼくたちには見えないけれども。さて、カンテラを下げている時代はどうだったのだろう。採掘に伴って出る石の粉塵、それに湿気、さらにカンテラから出される油煙、これらは坑内から排出されることなく、抗夫たちの体の奥底にまで入り込んでいく。19世紀、資本主義が形成されつつある時代に工場労働者の一日の労働時間は10数時間、その上生産物から出される各種「埃」が工場内から排出されるきっかけを失って労働者の口から吸い込まれる。ほとんど休むことなく酷使される肉体と衛生環境の悪さから、労働者たちは、数多く、結核などの重い病に倒れている。当然、それよりも過酷な労働現場である地下採掘場のことである。抗夫たちは、想像を絶する劣悪な労働条件であったはずである。

佐渡の金山の抗夫たちは、そのほとんどが、罪人であてがわれた。近代社会に入って、次第に「罪人」たちに対しても「人権」が考えられるようになっていくけれども、そうではない時代、「罪人」は「人」ではない。まるで言葉遊びのように、我が国ではそういう人に対して「非人」という名称を与えて、たとえ「生かしておく」としても、通常生活にきわめて支障のある境遇を準備している（隔離・囲い込み＝流刑、人別帳＝戸籍＝に登載しない、入れ墨を施すなど）。佐渡の抗夫たちは、その多くが、「非人」であったわけである。おそらく、人間の労働に対する思考・哲学は、洋の東西を問わず、同じはずである。フランスでは「非人」という名称を与えてはいないけれども、同じような境遇をつくっている。重罪人、もちろんその中には、時々の政治権力に抗った者（政治犯、反逆者）も含まれる。この点に関してぼくたちが通常知り得る「処罰」は、死刑（「火あぶり」「絞首刑」「銃殺刑」など、ついでのことながら、有名な「ギロチン」はフランス革命期に考案され、その後100年足らずで廃止されている）、「流刑（強制労働を含む）」、そして「禁固刑」などである。このうち、流刑については、ようやく、その実態が明らかにされつつある程度で、その全容を知る資料を得ることは並大抵なことではない。パリの地下採石場で働くほとんどの抗夫が、強制労働の刑を受けた「犯罪者」たちであった。つまり、死刑に次ぐ重罪人

であったということである。政争の激しいフランスのこと、つねに政治犯・反逆者がいる。強制労働の対象者は、それこそゴマンといるわけであり、一人のいのちが劣悪な環境のなかで失われようと、それに代替する労働力は十分に「補填」できたわけである。

…と、お二人の方を見やってみると、目が潤んでおられるような感を受けた。少なくとも「聞きたくもなかった話」としては受け止めておられないのだと、ホッとした。半端な知識を振りかざし、知ったかぶりをしているのではないか。そうとらえられてもしかなのない場面であったからである。

行く手に十字架が掲げられた門が見えた。坑内労働での死者を弔うための祭場であるのだろうと思ったが……。門をくぐると、頭蓋骨、大腿骨が坑道の両壁を作る形で、整然と積み上げられ、並べられているではないか。大腿骨の層、頭骸骨、大腿骨の層、頭骸骨の順で幾重にも重ねられ、それがずらりと壁面をなしている。どれほどの数であるのかと考えることはまったく無駄である。ぼくがこれまでの60年で出会った人の数、仕事柄の講演、通勤の際の狭い電車のなかで体をくっつけあった見知らぬ他人などを含めると、それこそ数えるのが無駄であるほどだと思うが、そんなものは人の数には入らないほどの光景である。これまでの坑道は、比較的、直線直行という感じだったけれど、ここは違う。うねうねと曲がりくねって、これでもか、これでもかと続く。「気味悪い」などという感覚はまったく起こってこなかった。ただただ、一つひとつ、頭骸骨が、それと対になっていたはずの大腿骨とが、直感的には無関係に、おびただしく積み上げられている光景に対して、ぼくがこれまで出会った人の数などほんの一握り、ぼくとは直接無関係のところいきわめて多数の人々が、いのちを育み、そして果てていったという事実を目の前で知らされることに、圧倒されていた。しかし、この人骨の壁は何を意味しているのだろうか？十字架の門は人骨の霊を慰めるための単なる装飾にしか過ぎないのか。もしそうだとしたら、ぼくは、この場は、きわめて悪趣味な「観光用地」にしか過ぎず、これほど死者を愚弄するものはないと思う。誰だってそうだろうが、自分の死後の姿を思い浮かべることができないのは、さまざまな習俗的な違いはあったとしても、死者は現実社会から隔離された土の中・深山・川・海などに葬られ、再び誰の目にも晒されないという「暗黒」を前提としているからだ。その「暗黒」から引きずり出され、誰何の区別もできないような形態で積み重ねられ、おまけに一見の者の目に晒される。悪寒さえ走ってくるのを感じ始めた。

「人骨の側壁」は続く。しかし、どうやら、ひとまとまりの側壁がいくつかに区分されているようである。その区分目に、年月のプレートが埋め込められ、やはり十字架が掲げられ、なにやら碑文を読むことができる。その碑文を読んでいて、ぼくは先ほどの悪寒が走った自分がみじめになった。これらの遺骨は、とりわけ18世紀、19世紀になされたパリ大改造によって、行き場

を失った亡骸であったのである。徹底的に大改造が行われた 19 世紀のものがとりわけ数多い。ナポレオンⅢ世がセーヌ県知事であったオスマン男爵に命じて行かせたもので、建物を壊し新しく造るというに止まらず、道路そのものを作り替えたのである。このことによって、パリ市内のいくつかの教会も取り壊され、もちろん墓地も取り壊されている。それによって行き場を失った遺骨がカタコンブに運び込まれ、新しい埋葬形式のもとに、葬られた。碑文プレートには教会名が刻み込まれ、聖書の一節も書かれている。碑文には、もちろん人名は彫られていない。しかし、そのおおよその出自が分かるようにはなっている。ある教会碑文はアラビア語で書かれていた。それはエトランジェ(「異邦人」)たちが葬られていた教会なのである。こうしてみると、ただ整然と、何の差別・区別もなく積み重ねられているおびただしい遺骨も、それぞれ、生前の出自があり、生活があったことを推測することができるわけである。

目の前で、文字通り手に触って確認することができる遺骨の群れの他に、鉄柵がされて入れなくなっている一角にも遺骨の山がある。これは一体何なのだろう。教会名・碑文もない。しかしながらその遺骨の群れの前は少し広く開いており、乾いた花束と三色の綬が「人骨の側壁」の前に捧げられている。三色の綬はフランスの権威を象徴する。革命や戦争で亡くなった人々を追悼するときには、必ず、それが捧げられる。定かなことではないけれども、その場は、フランス革命で命を落とした人々、あるいはその後の諸革命でいのちを落とした人々が、やはり「行き場」を無くし、「移住」したところなのではないだろうか。あるいは、この坑内で働く人々が労働途中に倒れ、葬られ、「もとの生活の場」である坑内に「移住」してきたのだろうか。一見の者の好奇心の目に晒されてはならないとばかりに、日常的には鉄柵で区切られている向こう側の光景。ぼくは、その鉄柵にこそ、カタコンブの熱き思いを感じてしまうのである。ぼくが見た限りでは確かめられなかった「教会の影」。もしそうだとするなら、それは、今時流行の無宗教墓というものではなく、「無名戦士の墓」なのではないかと、思いをめぐらせてみたわけである。

遺骨一つひとつ、おそらくカタコンブには数百万の柱が眠っている、その柱一つひとつ、微妙にそれぞれ形が異なっているのと同じように、数百万の喜び、悲しみ、苦しみ、その他おそらくぼくなどが味わったことのないような感情、経験の人生があったわけである。それを、今を生きるぼくたちが、どのような形式で弔うのか。カタコンブという、大きな街を造るための礎となっているところは、案外と、一人ひとりのいのちを礎にしてこそそのぼくたちがあるということを象徴しているのかもしれない。この思いを忘れてはならぬと、勇気を奮い起こして、カメラのシャッターを押した。ただただ、チケットをもぎってくれた係員の「ぼくが許すよ」との声をたよりに。幸いデジタルカメラなのでフラッシュは焚かなくても、あとの画像処理で、かなりのところまで鮮明に光景を写し出すことができるのである。

天井壁と人骨側壁との間に大きな空洞があるところがあった。その空洞を覗き込んでみると、限りなくという形容が大げさでないほどに、ぼくの背丈よりやや低い高さで人骨の「平原」が続いている。このことから、今まで人骨を表面だけ積み上げた塀なのだと思ってきていたことを訂正せざるを得なかった。うねうねと曲がりくねっている「坑道」は、すべて人骨の層によって区切られているのである。ということは、ぼくがあれほどに求めていた採石場跡なのだ、この斎場は！そう見直してみると、なるほど太い支柱があちこちに建てられている。採石場があらゆる意味での弔いの場になっている、非常に象徴的なこの空間の存在の意義を改めて感じてしまうのである。

数百万のいのちが眠る斎場の終わりを示す門をくぐると、ホッと気が抜けたようになった。行く手には少し広場がある。そこで一休憩をしようと、据えられてあるベンチに腰を下ろした。そこは頭上高くドーム型になっており、木製の梁、石の梁がめぐらせてある。それぞれには彫刻や彩色が施してあった。それらは抗夫たちが、過酷な労働の間にも、沸きあがる人間の感情を残しておきたいと願った形象なのであろう。どのような状況に置かれようとも、自らが人間であることを証そうとする逞しさ、美しさを感じざるを得なかった。果たして今のぼくに、そのような逞しさがあるだろうか。抗夫と同じ状況下にあったとしたら、虚無と厭世、絶望しか感じないし、表出しないだろう。改めて、人間の本来持っている逞しさ、敬虔さ、それに反する自分自身の弱さ、俗物さを知った。

「さあ、次に行きましょうか。」ベンチから腰を上げて続く坑道に行くと、もうそこは上りの階段であった。入ったときと同じほどの螺旋階段を登るのか、やれやれ、と口に出したけれど、入り口とは半分ほどの階段しかなかった。体に感じることはなかったけれど、カタコンブの坑道は、緩やかに傾斜して造られていたのである。それはぼたぼたとしたり落ちる水を排水する知恵なのであろう。出口では数人の若者が屯していた。彼らはカタコンブに勤める公務員のようなのである。彼らからリュックや鞆の内容チェックを受け、しとしとと降る雨の街に出た。

(2001年1月)